

第1テーマ

出アフリカに新証拠

2025. 1. 31 旗

人類初の「出アフリカ」に新証拠

従来説より 15万年古く

人類が初めてアフリカを出てユーラシア大陸に進出したのは、少なくとも195万年前だったことを示す証拠が見つかった。米アーカンソー大学などの国際研究グループが科学誌『ネイチャー・コミュニケーションズ』(20日付)に発表しました。これまで考えられていたより15万年さかのぼります。

証拠が見つかったのは、ルーマニアの中央部を東西に走るトランシルバニア山脈から流れ出るオルテツ川沿いにあるグラウンセア遺跡です。1960年代に発見されたこの遺跡からは、人類の骨の化石が見つかっていませんでしたが、周辺を含めると5000個以上の動物の骨の化石が出土していました。研究グループは、それらの骨の化石の表面に人類の存在を示唆する痕跡がないか綿密に調べました。その結果、石器によって動物の肉が骨から切り取られた時にできる切断の痕があるものを20個特定することができたといいました。これらの骨は、年代測定により少なくとも195万年前と推定されました。

人類がアフリカを出てユーラシア大陸に進出したことを示す証拠でこれまで最も古いとされているのは、ジョージアのドマニシ遺跡で見つかった約180万年前の原人の骨でした。グラウンセア遺跡はドマニシ遺跡よりもアフリカから遠く離れています。

アーカンソー大学のクレア・テルヒューン准教授は「この遺跡は初期の人類がすでにユーラシア大陸のさまざまな環境を探索し、居住し始めていたことを証明しており、後に彼らの生存と拡散に重要な役割を果たすことになる適応力を示しています」と述べています。

従来説 篠田謙一著『人類の起源』

第四章 ヨーロッパへの進出 出アフリカの時期

「ホモ・サピエンスの出アフリカは、人類史の中でも特筆すべきできごとです。それは活動範囲を一挙におし広げ、現在に至る繁栄のきっかけとなりました。

さまざまな証拠から、ホモ・サピエンスが二〇万年前以降に何度か出アフリカを試みたということが明らかになっていますが、私たちにつながる祖先の出アフリカは、**六万～五万年前**のことだと考えられています。そのひとつの根拠として、ミトコンドリアDNAとY染色体DNAの系統解析が挙げられます。

現代人の分析によって、**男性**に受け継がれるY染色体のDNAでは、アフリカ人の持つ系統と世界の他の集団が持つ系統の分岐は七万五〇〇〇年前以降で、アフリカ人以外の集団の共通祖先が五万五〇〇〇～四万七〇〇〇年前に存在したと推定されています。一方、**母系**に遺伝するミトコンドリアDNAで見ると、アフリカ人との分岐を九万五〇〇〇～六万〇〇〇年前、アフリカ人以外の共通祖先が五万〇〇〇～四万五〇〇〇年前に存在したと推定されます。

この値は、突然変異がどの程度の時間間隔で起こるとするのか、一世代を何年と見積もるのかで異なるので、推定に幅が出てしまいますが、肝心の**出アフリカについては、おおよそ六万～五万年前**と考えると矛盾はありません。なお、アフリカ人との分岐年代と、アフリカ人以外の共通祖先の年代に開きがあるのは、出アフリカ後に消えてしまった系統があることを示しています。現代人のデータだけでは、出アフリカの状況を正確に推測するのは難しいのです。」

人類の起源
2022年2月25日初版
2022年12月25日9版
中公新書 2687

著者 篠田謙一
発行者 安部順一

本文印刷 雄 印刷
カバー印刷 大能製本
製本 本 少島製本

発行所 中央公論新社
〒100-9182
東京都千代田区大手町1-7-1
電話 編集 03-5296-1791
編集 03-5296-1891
URL <https://www.chuko.co.jp/>

©2022 Kenichi SHINOBU
Published by CHUO-KORON SHINSHU, INC.
Printed in Japan ISBN978-4-12-10868-5-C1222

	世界の気候	アフリカ・ヨーロッパ	ユーラシア大陸	日本列島	アメリカ大陸・オセアニア
800万	ゴリラと分岐				
280万		エチオピア人			
180万		ジョウジア・ドマニン人			
100万			ネアンデルタール人 (ND)・ジャワ人・北京人	篠田謙一『DNAで語る日本人起源論』+新聞報道	
40万			ハル・アメイジャン (ネドフ砂漠) 43万アタブエルカ洞窟 (s p) ND	人類の歴史年表	
30万		ケニア・オロルゲサイリエ遺跡 石器		20230729 安彦克己作成	
20万		ホモ・サピエンス (HS)	交雑あり。 17. イスラエルで人骨		
15万		出アフリカ	ルーマニア・グラウンセアヌ遺跡		
15万	~13万 5000	コイ・サン人 (ホッ)	テントット・ブッシュマン) L0 採集狩猟民。 チベットにデニソワ人 (NDの姉妹種)		
10万		サハラ砂漠→	HSとND交雑 レバント地方 (地中海東部) スフル遺跡・カフゼー遺跡ホモ・サピエンス化石		
7万	氷河期。陸地拡大		8. 6万 HSラオス・タムパリン洞窟人骨。	水月湖年縞	スタンランド
6万	(=人皆同じ)	出アフリカ (少数) →	N)、ラ・バシエガ洞窟壁画 アルダレス洞窟壁画	Mの誕生。	
5万	氷河期		デニソワ人 (アルタイ・シベリア) →南アジア、人口増加→採集狩猟。		オーストラリア人 (アフリカから拡散)
4、5万		フランス・スペインでHSとND共存 (数千年)	シベリア西部ウスチシム→交雑 (HS×ND) (北極圏に人。ケナガマンモス (エニセイ湾沿岸)	人口急増	
4万	(後田田云雲)	ND遺跡	高アジアから東・北東アジアへ拡散	大陸を北に移動	

ネアンデルタール人 11万年前から急減?

スเปน研究グループ発表



ネアンデルタール人は11万年前以降、人口の急速な減少を経験していたことがわかったと、スเปน・パルセロナ自治大学などの研究グループが科学誌『ネイチャー・コミュニケーションズ』(20日付)に発表しました。約4万年前に最終絶滅に至るはるか前から絶滅への道をたどっていた可能性があるといます。

研究グループは、誕生から絶滅まで数十万年にわたる歴史の中でネアンデルタール人がどのような変遷をたどったかを調べました。注目したのは、内耳の三半規管です。三半規管は出生時に完全に形成されているため、時代ごとのネアンデルタール人の遺伝的背景を知る手がかりとなります。

約43万年前のスเปนのシマ・デ・ロス・ウエソス遺跡で見つかった集団、約13万~約12万年前のクロアチアのクラピナ遺跡で見つかった集団、約6万4000~約4万年前の西ヨーロッパ各地の遺跡で見つかった後期ネアンデルタール人集団の三つのグループの三半規管の形態について解析しました。

その結果、シマ・デ・ロス・ウエソス遺跡の集団とクラピナ遺跡の集団の三半規管の形態は多様性が高かったのに対し、後期ネアンデルタール人集団の三半規管の形態は多様性が乏しいことがわかりました。遺伝的多様性が乏しくなる原因として考えられるのはボトルネックと呼ばれる人口の急速な減少です。

13万年前から8万年前にかけて地球の気温は高くなったり低くなったりを繰り返して、大きく変動しました。研究グループは、クラピナ遺跡のネアンデルタール人の集団がいなくなった約11万年前以降、気候変動の影響でネアンデルタール人の人口が急速に減って各地に孤立したのではないかと考えています。

「古代DNA-日本人のきた道-」

3月15日から6月15日まで、国立科学博物館(東京・上野公園)で特別展「古代DNA-日本人のきた道-」が開催される。

遺跡から発掘された人骨に残るごくわずかなDNAを解読し、人類の足跡をたどる古代DNA研究。近年では解析技術の発展とともに飛躍的な進化を遂げ、現代人と同じレベルでの解析も可能になっている。

本展では、日本各地の古人骨や考古資料、高精細の古人頭骨CG映像などによって、古代人の姿と、その暮らしぶりや文化を解き明かしていく。

お得な平日限定音声ガイドセット券(2500円)と前売り券(一般・大学生2000円ほか)が好評販売中。詳細は同展公式サイト(「古代DNA展」で検索)で。問い合わせはハローダイヤル=050(5541)8600=へ。

3月15日~6月15日 国立科学博物館

■前売り券発売中



○宗任を概観。 京に引かれ、伊予、太宰府と移され、筑前大島で歿した。

(1) 前九年の戦い (1062) 後の宗任の生涯

「宗任雑記」(丑寅日本雑記全)

「厨川落柵以来にして宗任、兄・貞任末最の際に遺言せしを心に誓ふ。

〈生きて一族の子孫となれかし、生きて残るは死すより辛きとも、生命を自から断は高祖安日・長髓彦の代より禁ぜる行為なれど、(中略) 俱は千代童丸一人で冥路のたどりとす。依て汝等、夢々余の遺し言葉を越て我があとに殉ずるを赦しまづ。特と護り仕るべし〉

とて貞任、子息・千代童丸と二の樓に果たり。宗任心得て生を捕身の恥を一族共に耐ゆために、兄貞任・子息千代童丸の首級を携へて源義家に推参して捕はるなり。

天治丁未八月十二日 松本秀則

- ① 安倍貞任の二子・高星丸は東日流に逃れ安東家を再興する。
- ② 天治丁未は大治二年(1127)の誤記か？
- ③ 記載者の松本秀則は下妻市宗道の宗任神社宮司が代々その名を世襲している。同社には中世に使用された文字が混じる四二〇〇字からなる『縁起書』がある。「皇朝元永暦己亥歳晚秋良辰吉日」とあり、1119 年に書かれた書。

「秋田系図訂正前之巻物」(丑寅日本記全)

「宗任

公卿百官以為北國寒氣甚烈無見梅花手乃携一枝、問宗任。笑云 我里是梅花、不知都云何。我が國ノ梅花トハ見タレド大宮人ハ何ト云ラン 公卿百官皆感之、因宥死罪、放流筑紫。宗任後胤、松浦水軍、子孫涉薩陽山陰陽。宗任女子、出羽御館五郎基衡室。」

- ① 「系図訂正前」とは徳川幕府に提出しない系図のことで、内秘の内容も記した。
- ② 梅花のエピソードは夙に有名で、宗任の機知に公卿達が舌を巻いた。
- ③ 宗任の後胤が松浦水軍を立ち上げたと読める。

「築紫松浦之安倍族」(石塔山大山祇神社秘傳 大の2)

「治暦三(1067)年、安倍宗任その舎弟家任、伊予に配さる。亦、安倍良照を大宰府に配したり。(略) 宗任は松浦に水軍を組して、唐・天竺・南蕃に往来す。宗任、永保元(1081)年7月1日寂し、筑紫大嶋に葬むらる。

正平十二(1357)年2月 松浦太夫頼基

- ① 宗任が松浦水軍を組織したと読める。入滅地は筑前大嶋。没年は疑問。

宗任墓；筑前大島の東寧山安昌院、位牌の戒名「安昌院殿 海音高潮大居士」。先代の住職安川浄生の著書『安倍宗任』；天仁元年(1108)2月4日没、77歳。宗任神社の『縁起書』では天仁元年9月9日没。



宗任の墓



旧墓

(2) 安東船

①「北辰之風土記 三」(東日流外三郡誌 第360巻)

「安東高星丸(略)居を藤崎に置いて十三湊を開き、異土との通商を以て一族は榮ひたり。築紫の松浦より宗任の便りと俱に船大工来たり。安東船を進水し異土との商益あり。」

② 「安東治領史」(東日流外三郡誌 第360巻)

「安東一族をして海を道と開ける要因は、築紫の安倍宗任が一書に依れるものなり。むらごみ水軍を頭とせる倭寇は、松浦水軍と俱に海賊行爲をして十三湊に来舶せるを犯したるは事實なり。」

(注) むらごみ水軍は村上水軍こと、村組とも。

③ 「宗任状」 呼応する史料が『北斗抄』

「陸奥を去して候間久しく候へども、われ汝を見給ふは乳兒面候他、覚へ候はず。筑紫の國に、汝を父母何方相似て候ぞ、海月に眺居候。東日流の候は、余未踏にて覚へ候はず。汝が成身の相、幾程にも想い廻らし居候。恨らめしく候へども、厨川の事の候を忘れず。父様・孫父様な菩提を頼置き候。(略)

一族無敵の計は海に候事ぞ。以後の要と奉るべし。六人船大工を遣したる程に能く習候へて、余老逝ならざるに船造り候へて大島に汝相を見さしめ給へとこそ急筆の本報を仕り候。卒爾乍老婆心一状以て如件。

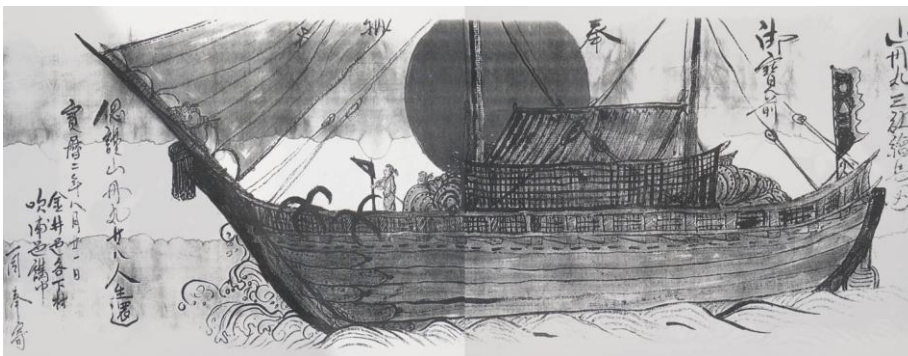
天永辛卯年二月十日 八十三歳翁 三郎宗任」

(注) 天永辛卯年；1111年で、この年八三歳は疑問。

③ 「紅毛國諸神録」(石塔山大山祇神社秘傳 大の2)

久壽三(1157)年 山丹丸の船絵馬史料。

「吹浦より砂泻に航し、肥前松浦に寄りて一路揚州に寄りて中航修船を盡し、摩禮島海を渡る。



風待六日八日をなし、一路天竺生露无島を亞羅比亞國紅海に至る。船を志伊治湾に入れ紅毛國に上陸。(略)紅毛國巡脚せる一切の手記は久壽三年、李竹林は届けたり。」

この船絵馬には「山丹丸二

八人生還」の書き込み。別の史料⑤「山丹丸船主従、皆歸郷」(石塔山大山祇神社秘傳 大の2)には、二八名の船乗者の名が記載されている。

(3) 造船所

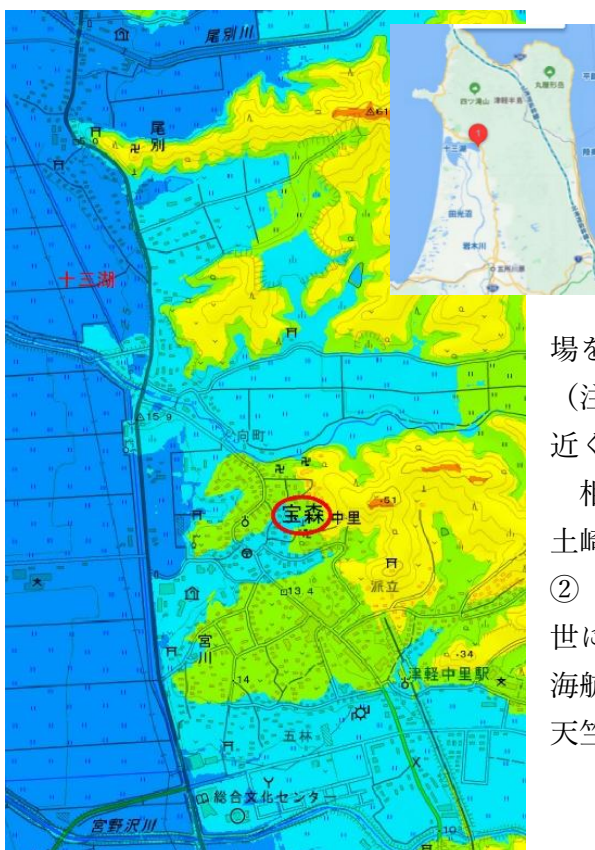
① 「起安倍一族源家仇」(永保之再興、など)

「久安己巳(1149)年、十三浦・中野里・寶盛に造船場を築きぬ。」若宮(城堺域之事)

(注) 中野里は津軽鉄道終着駅の津軽中里。寶盛は同駅近くで宝森の名。

相内(鮎内)。藤崎=木挽き・舟場・掘り割りの地名。土崎(秋田)

② 「安倍一族は、造船の工程を常に固成ならしめたり。世に安東水軍・松浦水軍の威覇知らざるものなかりき。海航欲にして完成さるる安東船ぞ、朝鮮・支那・南蛮・天竺まで航着せし。(奥州風土記全)

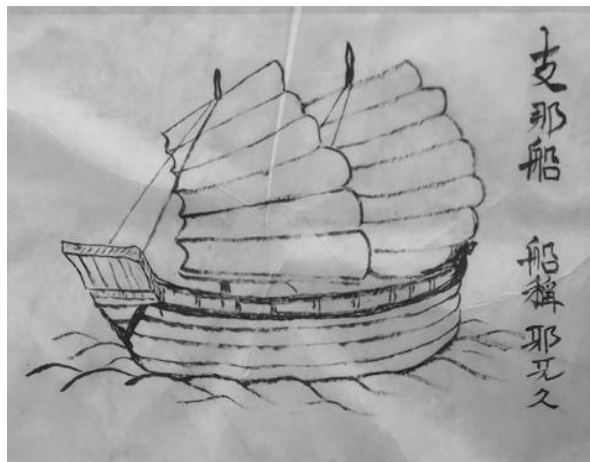
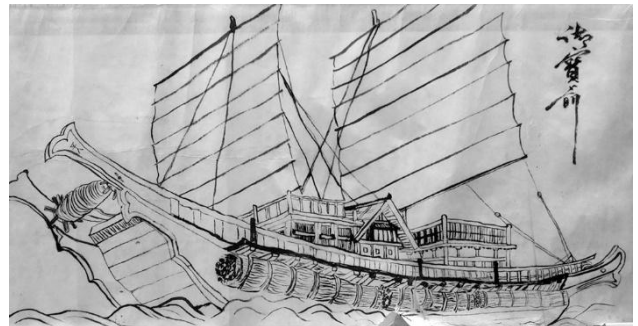


●安東船 承保丙辰（1075）造船

- ・木材；中山大葉檜・板継ぎ目の防水には地湧油。松材・杉材・羅漢柏。板継ぎ目；地湧油。
- ・後ろ櫓を高くする；水先視界広くする
- ・本帆三柱、船倉。底階二段。斜帆。
- ・船底：二重仕切り。沈没なし。
- ・中仕切り；十二。←唐船
- ・舵；補ありて長航安全
- ・海路図；造る。←揚州に渡学した者多し。昼；日輪。夜；北極の不動星。羅針。
- ・技；晋の流民。高麗からの帰化人＝俱耶漢船。

④松・檜を材とせる安東船は、飽田なる地湧油を塗りに黒し。二柱の帆、前後の船出架帆にして速し。古きには船胴に竹を束して付し、箱型より安東船に至る施工は山靱の紅毛人モゼフにて完造されたりと語部録に傳はるなり。（北斗抄 11）

- トナリ；川舟。海獣の皮を木組みに張る。
- ハタ；漁船。磯舟。一本丸太。船端に板を縄結



- 板組造り；浮力に竹束。
- 唐船（ヤンク）→（模倣）→安東船
戎克（じゃんく）
- 安東船；山靱交易。船群六艘＝安東水軍。
玄武廻；北海
山靱廻；萬達・蒙古
高麗廻；
黒竜江廻；
揚州船
天竺船